第 75 回 東葛しぜん研修会

尾瀬の自然を歩く

勝股政雄（船橋市）

日　時：2016 年 8 月 28 日（日）～29 日（月）
場　所：鳩待峠から尾瀬ヶ原周遊（群馬県）
参加者：東葛会員 23 名、協議会 3 名、一般 1 名
担当指導員：勝股政雄・藤澤一博・三嶋秀恒

今年から駐車場が峠の少し手前に移ったので、鳩待峠は静かだった。至仏山は見えなかったが、峠のおいしい空気を吸いながらベンチでゆっくり昼食を食べた。昼食後、3 班に分かれて山の鼻に向かって 12 時に出発。入り口に、「ごみ持ち帰り運動」の横断幕がある。全国に先駆けて、尾瀬で始まったごみの持ち帰り運動の意義を確認した。また、横断幕の下に、種子落としマットがある。そのそばに生えているアカツメクサとオオバコを見ながら、尾瀬が抱える問題の一つである移入種問題を考えた。

峠からの下りの道は、前夜の雨で濡れていた。滑らないように慎重に下っていくと、道の両側にブナの大木が目立つ。ブナの落ち葉がスポンジの役割をし、雨水を蓄えることから、ブナは大きな役割を果たしている。このことに気付いてからは、全国でブナの伐採から植林へと変わっていった。

清冽な水が、苔のついた岩の間を流れている。鳩待沢に着いた。沢筋にオオカニコウモリ、サラシナショウマ、ハンゴンソウ、オオバセンキュウがちょうど花の盛りであった。尾瀬の花に期待していたので、皆感激していた。

テンマ沢を渡るとき、水の中にイワナを発見した。上流から流れてくる餌を待っている。鰭が白っぽく縁どられているので、イワナと確認しやすい。しばらく行くと、熊よけの鐘があった。そしてそのあたりの笹が、すっかり刈り取られていることに驚いた。この辺りは、たびたび熊が出没するので、登山者の安全のための措置であることを知り、「これも仕方ないか」と納得。ミズバショウの実も葉も、ほとんど食べられていた。

平坦な木道を行くと、カラマツの大木が林立していた。そして、ミズナラの大木に圧倒され、また、ツルアジサイなどのつる植物がシナノキなどに絡まって上へ上へと延びている様子に、手つかずの自然を感じることができた。

山の鼻に着いた。人が少なく静かだった。少し休んで湿原に出ると、エゾリンドウがまず目についた。青い花色がきれいで、今が盛りであった。背の高いアブラガヤも存在感があった。湿原に点々と白く目立つ花は、ウメバチソウ。一日に一本ずつ雄蕊を立ち上げるので、咲いてから何日目かわかる。まるでカレンダーのような花だ。川上川の拠水林では、トリカブトが美しかった。加えて木道沿いにオオマルバノホロシが真っ赤な実をつけ、輝いていた。尾瀬ヶ原は、周りを 2000m級の山々に囲まれている。広大な湿原に池塘が点在し、浮島とヒツジグサが合わさって、いかにも尾瀬らしい光景だ。

ヒツジグサはまだ花をつけていたが、すでに葉は紅葉が始まっていた。ナガバノモウセンゴケ、オゼコウホネ、アケボノソウ、ミズオトギリなどを、立ち止まって観察しながら行った。ベンチで休憩しながら、尾瀬ケ原に広がる泥炭層を知った。調査した箇所では、５ｍの厚さがあったという。ここまで成長するには、約 7000 年かかるそうだ。
貧栄養・酸性で、過湿という過酷な環境のもとで生き抜く貴重な植物や動物たちと、類まれな景観を見せる尾瀬ヶ原の素晴らしさを知ることができた。さらに、戦後に発表された尾瀬ヶ原ダム建設計画に全国から反対運動が起きたこと、そしてそれが日本の自然保護運動の始まりであり、そこから日本自然保護協会が誕生したことを知った。
この尾瀬を、私たちの次の世代にぜひ残したいと思いながら歩いて行くと、竜宮小屋に到着した。二人のガイドにお礼を言って別れた。
　夕食後、真っ暗な尾瀬ヶ原に出てみた。都会では味わえない暗闇の世界に浸ることができる。幸いなことに、期待通り、降るような星を見ることができた。「あれが天の川。「あそこに白鳥座がはっきり見える。うれしい。」と、木道に座って存分に楽しんだ。

　二日目は、朝から青空が見えた。メンバー全員の心が浮き立った。この日は、直接ヨッピ橋へ行く短縮コースと、見晴から東電小屋を回るコースに分かれて行動した。
竜宮小屋のある拠水林の中を流れる沼尻川を渡ると、福島県に入る。高層湿原が広がっているのを見ながら歩いていたら、雨粒が顔に当たった。誰かが後ろの方で「わあーきれい 虹だ。」と叫んだ。見ると、東電小屋の方に、きれいな完全な形の虹がかかっていた。しばらく見とれた。
　見晴に着き、冷たい弥四郎清水を飲んで出発。西の方を見ると至仏山が、山頂の雲が取れ、くっきりと山容が望める。木道を行くと、チョウジギクがたくさん見られた。
珍しい花の姿に、しゃがんでじっくり観察した。只見川にかかる東電尾瀬橋を渡ると、そこには見事なお花畑が広がっていた。タムラソウ、ミヤマセンキュウ、オゼヌマアザミ、ミズギクなどの花たちに出会えた。林を過ぎ、東電小屋で休憩。

　歩を先に進めてヨッピの吊り橋を過ぎる頃には、空はすっかり晴れ上がり、とうとう燧ケ岳も全容を現した。東北以北で最高峰だ。上空を舞うタカや、大きな体のアオサギ、草の上で鳴くホオアカなどの鳥を見ながら行くと、牛首に到着した。ベンチに座り、周り中の山々と湿原を見渡すと、次第に心が落ち着いてくるのを感じることができた。
　牛首を過ぎ上田代に至ると、池塘が多いため、トンボたちが多く飛んでいた。アオイトトンボ、オオルリボシヤンマが舞っている。昨日と違って晴れ上がり、気温も高くなったので、盛んに動いていた。アオイトトンボは雄と雌が連なり、オオルリボシヤンマは、尾の先を水中に差し込んで、盛んに産卵していた。どちらも子孫を残すための営みであり、その様子を見ながら、トンボたちの生命力を感じた。山の鼻のビジターセンター脇で弁当を食べて力をつけ、鳩待峠への登りにかかった。青空に浮かぶ白い雲と、木立越しに見える至仏山を望みながら、尾瀬を体で感じつつ汗を流した。休みを取りながらゆっくりと登り、全員元気に峠に到着することができた。